〔資料紹介〕

記念センター所蔵寄贈資料目録⑦

東亜同文書院大学記念センター研究員　武井　義和

今回は2011年末から2012年にかけて、**有森茂生氏**と**三田良信氏**より東亜同文書院大学記念センター（以下、「記念センター」と略記）へ寄贈された資料を紹介する。

Ⅰ.

有森茂生氏からは今回も多くの貴重な資料を寄贈頂いた。また、大町桂月・猪狩史山共著『杉浦重剛先生』（政教社、1924 年）、『支那の排日侮日に就て』（陸軍省、1931 年）、神田正雄講述『香港より観たる支那』（東亜同文会、1938 年）、佐藤巌『杭州西湖の栞』（内山書店、1939年）、『興亜の先覚　浦敬一書翰附略伝』（東半球協会、1941年）、『回想杉浦重剛　その生涯と業績』（杉浦重剛先生顕彰会発行、思文閣出版制作、1984 年）、杉原正泰・天野宏『横浜のくすり文化』（有隣新書、1994年）等の図書類、ならびにNo36－45で示すように近衛文麿らの演説や東条英機の戦陣訓などが収録されたレコードも複数頂いた。

No36－45、近衛文麿演説レコード「時局に対する国民の覚悟」

まず、杉浦重剛に関する一連の資料について〔No36－33 から 36－41、36－54〕。杉浦は 1902（明治 35）年より翌年病気で引退するまでの短期間、東亜同文書院第 2 代院長を務めたが、1885年東京英語学校（後に日本中学校）を同志らと創設し、1914（大正 3）年東宮御学問所御用掛として皇太子裕仁親王の教育係を、また 18 年からは裕仁親王の妃となる久邇宮良子女王（後に香醇皇后）の御学問所倫理科も嘱託として担当したことで知られる(1)。

今回頂いた資料はいずれも東亜同文書院院長辞任後の時期のものであり、門下生の島弘尾に宛てたはがきや封筒が目立つ。島弘尾は滋賀県大津市出身、1891（明治 24）年頃に杉浦が主催する称好塾に入塾、後に麹町銀行の重役となった人物である。有森氏寄贈の前掲『回想杉浦重剛　その生涯と業績』には、「島毅軒」の名で書かれた杉浦の回想文が収録されている(2)。

一方、No36－41「哭長谷川博士」は「長谷川博士」、すなわち工学博士・長谷川芳之助への追悼辞である。長谷川は杉浦の生年と同じ 1855（安政 2）年に唐津藩士の子として誕生、明治初期に大学南校、開成学校で学んだ後にアメリカ・ドイツへ留学、帰国後三菱会社に入社し吉岡鉱山の発展などに尽力した。1893（明治 26）年退社独立し、炭鉱を自営するかたわら若松製鉄所設立に努力したが、病で実業界を引退した後は政治的な言動を行なっている。例えば 1902 年衆議院議員に当選したほか、「韓国合邦論」を主張、さらに 1911 年春には日本の対米方針のあり方などの研究を目的とした太平洋会の結成に大きな役割を果たすと

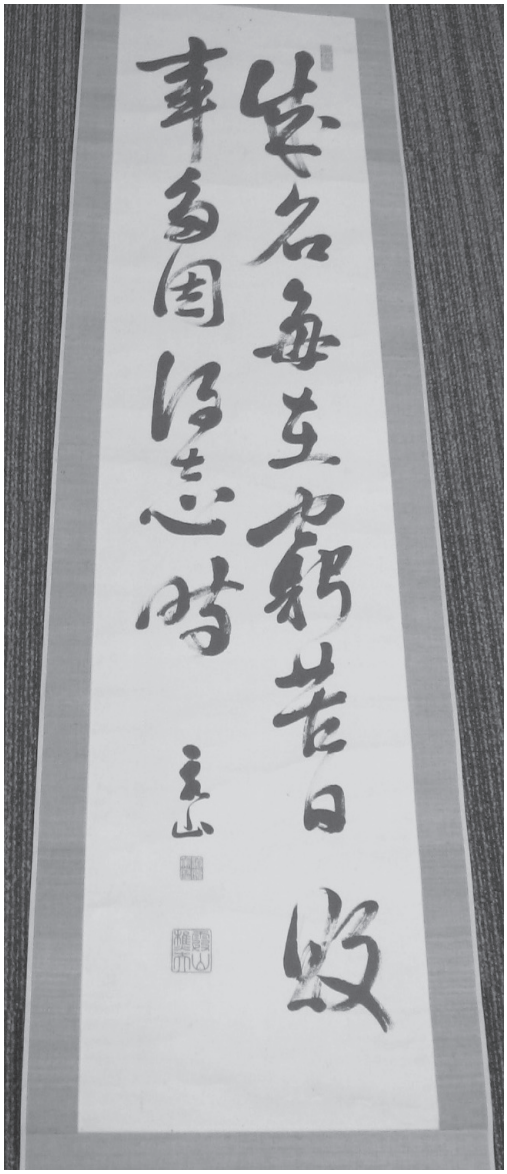
同時に、根津一らとともに同会幹事に就任した。同年10月に辛亥革命が勃発すると革命派に協力しようと画策したが、翌12年病死した(3)。

彼は大学南校、開成学校時代に杉浦重剛とともに学んだ仲であり、この時期より両者の関係は長谷川が没するまで継続した。前掲の『杉浦重剛先生』には、1909年5月に旧東京英語学校と日本中学校の同窓生が同窓会とあわせて杉浦の病気全快祝いを開いた際に、長谷川が行なった演説が収録されているが、その冒頭で「予は杉浦氏とは無二の友である」(366 頁)と述べていることからも分かる。この「哭長谷川博士」は山口正一郎『博士長谷川芳之助』(政教社、1913 年)に写真が掲載されているが、それには末筆に「辱知 杉浦重剛拝具」とあるのに対し、No36－41 はそれがないなどの違いが確認できる。

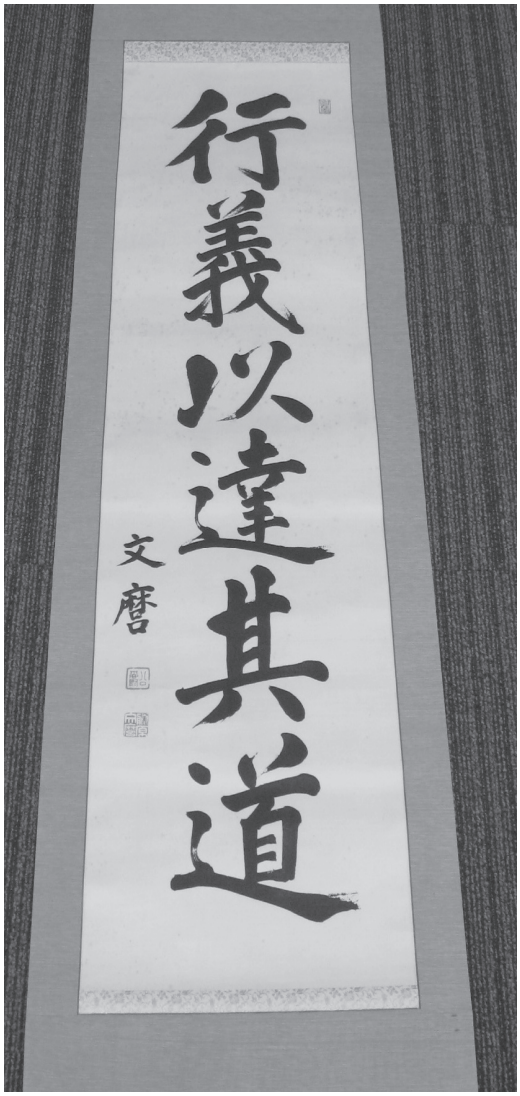
ほかに、No36－54 杉浦の還暦祝いに作成された写真はがきなど、珍しいものもある。

No36－54、杉浦重剛写真はがき(還暦祝賀記念)

No36－48・49 は近衛篤麿・文麿親子の書幅である。記された正確な年代は不明だが、篤麿書「成名毎在窮苦日敗事多因治志時」、文麿書「行義以達其道」はともに達筆で力強さがある。東亜同文書院の歴史は、その経営母体だった東亜同文会を省いて捉えることはできない。しかも近衛篤麿・文麿親子はともに東亜同文会会長を務め、文麿は東亜同文書院院長も務めたことを考えると、これらの書幅は歴史的な重みを含んでいるといえよう。



No36－48、近衛篤麿書幅



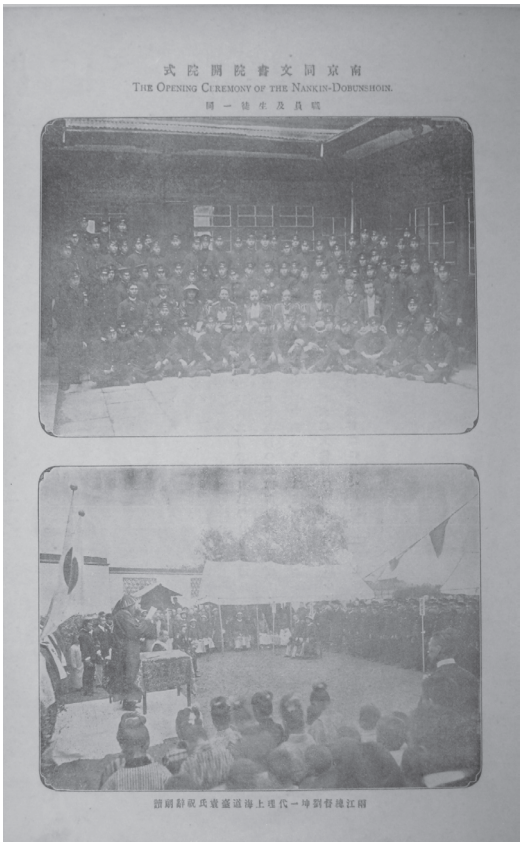
No36－49、近衞文麿書幅

一方、No36－50 は浦敬一が稲垣万二郎に宛てたはがきである。郷里の事情などを会って聞きたいという趣旨が記されている。浦は 1860（万延元）年に肥前平戸で誕生、1887（明治 20）年荒尾精が清国で主宰した漢口楽善堂に加わり、新疆イリ方面への視察調査に赴いたまま行方不明となったが、清国渡航前の1881（明治14）年から83年にかけて東京の専修学校で学び、その後清国に渡るまで東京と故郷の間を往来した時期があった(4)。また、宛先人の稲垣満二郎は稲垣満次郎のこと。1861（文久元）年に浦と同じく平戸で誕生し、1882（明治 15）年東大に入学、86 年英国ケンブリッジに留学した。帰国後外交官となり、1890 年代にはシャム（現在のタイ）と通商条約を締結したほか、駐バンコク弁理公使を務めた。1907年特命全権公使としてスペインに赴任したが、翌 08 年マドリードで病没した(5)。したがって、このはがきは両者が東京にいた1880年代前半から半ばにかけての時期、元号でいえば明治 10 年代のものと考えられる。なお、塙薫蔵『浦敬一伝』（淳風書院、1924 年）には稲垣の名が所々登場する。

No36－46・53・55・56 は東亜同文書院や近衞篤麿、清末の高官だった劉坤一・李鴻章・張之洞などの写真である。これらはもともと雑誌『太陽』に掲載されていたものであるが、そこから外され現在は一枚物の状態となっている。調査の結果、かつて収録されていた巻号と発行年代が判明したので、後掲の寄贈資料リスト中に記しておく。

No36－53、写真「清国の三総督」

このうち、No36－46 は原資料に「南京同文書院開院式」と題名が付されているが、上海東亜同文書院の開院式である。1900（明治 33）年に誕生した南京同文書院が義和団事件の混乱を避けて同年上海に移転し、翌01 年5 月上海で開学したことは『東亜同文書院大学史』などで述べられているが、開学時点ではまだ「南京同文書院」のままであり、同年 8 月頃に「東亜同文書院」と名称が変更されたのである(6)。『東亜同文書院大学史』88 頁に掲載されている「東亜同文書院開院式写真」と同一の写真であることからも、それは確認できる。



No36－46、写真「南京同文書院開院式」

いずれにせよ、創立期の東亜同文書院の写真は管見の限り非常に少ないため、貴重な資料となるであろう。なお、No36－55 に見える「清国北京東亜同文書院卒業式」の題名であるが、「北京」はおそらく「上海」の誤植ではないかと思われる。

他の資料も詳細にご紹介するべきだが、紙幅の関係で他日に譲りたい。

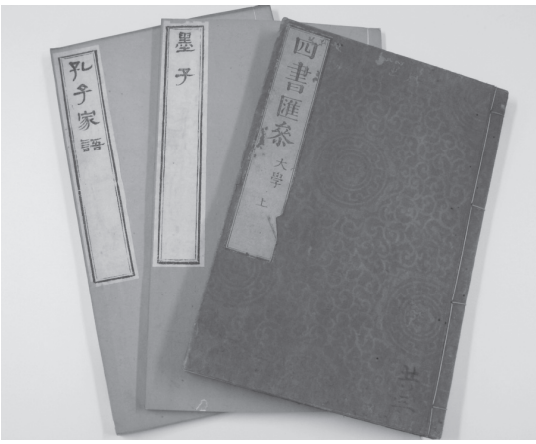
Ⅱ.

三田良信氏からは、大村欣一東亜同文書院教授の蔵書を頂いた。合計 224 冊にもおよぶ膨大な漢籍で、三田氏が大村家より譲り受けられたものである。同氏が主催する「石川漢字友の会」ご一行が 2012 年 8 月 23 日に、愛知・岐阜への研修旅行の一環として記念センターを訪問された際に寄贈されたものである(7)。

『創立三十週年記念　東亜同文書院誌』によれば、大村欣一は石川県の出身、東京帝大卒業後 1907(明治40)年に東亜同文書院へ教授として赴任し、支那地理、支那外交史、支那通商史などの科目を担当した。1916(大正 5)年辞職し東亜同文会で支那省別全誌編纂を主催した後、1920 年東亜同文書院に復帰。中華学生部長や研究部委員主任などを務めたが、1925 年病没した。

東亜同文書院在職中の 1913(大正 2)年と 15 年に『支那政治地理誌』上・下巻を著したほか、死去後の 1929(昭和 4)年には東亜同文会により遺稿の一部が『支那之実相』として出版された。また、死去後に従六位に叙せられた(108 頁)。

こうした思想と業績の一端を東亜同文書院同窓生ならびに愛大同窓生に広く知らせるために、三田氏が 2011 年に復刻印刷された『恩師大村欣一教授を想ふ』(同一内容は『同文書院記念報』Vol.19 にも掲載)の後書きには、同氏によって大村の家庭環境や東亜同文書院赴任までの経緯が記されている。それによれば大村は金沢出身、実家は代々印刷業を営み今日にいたる旧家で、長男であったため本来ならば家業を継ぐべきところを弟の重松に委ね、自身は第四高等学校・東京帝大で学んだそうである(8)。



寄贈された書籍の一部

この『恩師大村欣一教授を想ふ』はもともと、1926(大正 15)年 11 月 17 日に書院 22 期生の中濱義久が『上海日報』に寄せた「恩師大村欣一教授を想ふ」と題する追懐文である。重松が 80 数年前に兄を追慕して印刷したものが大村家に残され

ており、それを三田氏が再度印刷し小冊子としてまとめられたものである(9)。その中で「…大村教授に関して第一に追懐せらるゝは、その学識の豊富なることなり。教授の、その支那歴史に対する蘊蓄は何人と雖も之に追従するを許さず、…」(10)と記される通り、膨大な蔵書はその内容も多岐にわたっており、大村の中国研究の奥深さを強く感じさせる。

大村 欣一

末筆ながら、今回の目録に掲載した資料を寄贈して下さった**有森茂生氏**と**三田良信氏**、そして**大村家の方々**に厚くお礼申し上げます。

註:

(1) 杉浦重剛の詳細については、大町桂月・猪狩史山共著『杉浦重剛先生』(政教社、1924年)を参照。

(2) 島弘尾の略歴については『回想杉浦重剛 その生涯と業績』596 頁(杉浦重剛先生顕彰会発行、思文閣出版制作、1984 年)。麹町銀行は 1889〜1927 年まで存在した銀行で、川崎第百銀行に合併された(銀行変遷史データベース)。なお、『回想杉浦重剛 その生涯と業績』に島の略歴ならびに彼が記した杉浦の回想文等が収録されていることや、麹町銀行の情報については、有森氏が丹念に調査された上、筆者にご教示頂いたことにより明らかとなった。ここに有森氏に謝意を表したい。

(3)山口正一郎『博士長谷川芳之助』(政教社、1913 年)を参照。

(4)中村義・藤井昇三ら編『近代日中関係史人名辞典』(東京堂出版、2010 年)、塙薫蔵『浦敬一伝』(淳風書院、1924 年)を参照。

(5)『国史大辞典』、前掲『近代日中関係史人名辞典』を参照。

(6)『東亜同文会史』333、335 頁(霞山会、1988年)。

(7)「石川漢字友の会」の宮前外弥旺氏からは、後日研修旅行に関する資料として記念センター見学の様子を伝える北国新聞記事のコピー、研修旅行の日程、旅行道中と記念センター見学の様子を謳った自作の漢詩を郵送頂いた。

(8)『恩師大村欣一教授を想ふ』22〜23 頁(大村印刷株式会社印刷、三田良信発行、2011 年)、『同文書院記念報』Vol.19、29 頁(東亜同文書院大学記念センター編集発行、2011 年)。

(9)同上。

(10)前掲『恩師大村欣一教授を想ふ』4 頁、前掲『同文書院記念報』Vol.19、22 頁。

※大村欣一の顔写真は東亜同文書院大学記念センター所蔵の卒業アルバムより。

【凡例】

(1)年号は主に西暦表記または西暦と元号の併記としたが、元号で表記した箇所もある。

(2)有森氏の寄贈資料番号は、通し番号として登録している。

(3)歴史的な人物の名前については、資料紹介およびリストでは敬称略となっている。

(4)「寄贈年月日」は資料が寄贈された日、もしくは記念センターに到着した日を示している。

2011～2012年度寄贈資料目録

No		日付	内容	差出人	受取人	寄贈者氏名	寄贈年月日
36	36 -33	1907年4月19日〔ヵ〕	はがき	杉浦重剛	島弘尾	有森茂生氏（以下同じ）	2011年12月23日
	36－34	1911年〔ヵ〕8月1日	はがき	杉浦重剛	島弘尾		同　上
	36－35	1912年1月21日朝	はがき	杉浦重剛	島弘尾		同　上
	36－36	年月日不詳	はがき	杉浦重剛	島弘尾		同　上
	36－37		「題海舟伯城山曲草稿」				同　上
	36－38	①1905年8月5日（消印）	①杉浦重剛直筆封筒	杉浦重剛	島弘尾		同　上
		②1906年6月11日（消印）	②杉浦重剛直筆封筒	杉浦重剛	島弘尾		同　上
	36－39	①1911年〔ヵ〕3月29日（消印）	①杉浦重剛直筆封筒	杉浦重剛	島弘尾		同　上
		②(年不明)6月29日（消印）	②杉浦重剛直筆封筒	杉浦重剛	島弘尾		同　上
	36－40		杉浦重剛直筆漢詩短冊				同　上
	36－41		杉浦重剛直筆追悼文草稿（「哭長谷川博士」）				同　上
	36－42		レコード「東亜同文書院寮歌」（※昭和50年代のもの）				同　上
	36－43		根津一院長肖像タペストリー				2012年6月11日
	36－44		【戦前上海関係資料】				
			①上海工部局公園年間パス（1928.6～1929.5）				同　上
			②電車切符　計8点				同　上
			③南京シアター入場券　計3点				同　上
	36－45		【レコード】				
		1937年9月1日	①近衛文麿演説「時局に対する国民の覚悟」1、2				同　上
		同　上	②近衛文麿演説「時局に対する国民の覚悟」5、6				同　上
			③東条英機戦陣訓1、2				同　上
			④東条英機戦陣訓3、4				同　上
			⑤田中義一演説「国民ニ告グ」				同　上
			⑥永井柳太郎演説「青年に告ぐ」				同　上
	36－46		写真「南京同文書院開院式」（※雑誌『太陽』第7巻第8号掲載、明治34年7月発行）				2012年7月3日
	36－47	1934年	上海バンド（外灘）パノラマ写真				同　上
	36－48		近衛篤麿書幅				2012年10月20日
	36－49		近衛文麿書幅				同　上
	36－50	(年不明)10月4日（消印）	はがき	浦敬一	稲垣満二郎		同　上
	36－51		東京・楽善堂の商品の広告封筒				同　上
	36－52	1905年4月	軍事郵便	出征第二師団 今井清松	越後北浦郡 今井牧之助		同　上
	36－53		写真「清国の三総督」（劉坤一、李鴻章、張之洞）（※雑誌『太陽』第7巻第4号掲載、明治34年4月発				同　上
	36－54		杉浦重剛の写真はがき(還暦祝賀記念)				同　上
	36－55		①写真「清国北京〔ママ〕東亜同文書院卒業式」（※雑誌『太陽』第10巻第10号掲載、明治37年7月発				2012年11月20日
			②写真「上海東亜同文書院第二回卒業式」（※雑誌『太陽』第11巻第8号掲載、明治38年6月発行）				同　上
	36-56		①写真「北京に於ける近衛公爵及小村公使」（※雑誌『太陽』第7巻第12号掲載、明治34年10月発行）				2013年1月25日
			②写真「清国湖広総督張之洞氏」（※雑誌『太陽』第7巻第2号掲載、明治34年2月発行）				同　上
	36－57		中国で印刷された孫文肖像画ポスター				2013年2月16日
	36－58		清朝陸軍軍帽				同　上
	36－59		清朝海軍礼服				同　上

訂正

『同文書院記念報』Vol.18に掲載されている有森茂生氏寄贈資料の中のNo36－17「王正廷中華民国外交部長の東亜同文書院第26期卒業式祝辞文」は、「王正廷中華民国外交部長の東亜同文書院第26期卒業式参列断り状」の誤りでした。この場をお借りして訂正させて頂きます。